

を、女を物質扱ひにさせる氣をつい起させるやうな點がそれでは女に全然ないかと云はれ、ば、今の女の狀態では決して無いとも云へない氣が僕はして來た。つまり少しは男のそんな非道な言葉の中にも理由はない事はないと思はざるを得なかつた。勿論それは少からず男自身の罪ではある。男だつて口幅つたい事を云へた義理ではない。不埒な事を云へば直ぐ女から逆ねじを食はされるのだ。又僕は女の中にも中々尊敬に値する婦人がゐる事も知つてゐる。こんな事を云ふと笑はれるかも知れないが、僕は僕の妻の内によく神を感じる。それを感じる者は僕丈けであらう。或は又それは僕が妻に對して時々、疚しくなるからであらう。とに角僕は妻の内によく神のひらめきを感じて妻の内に神の在る事を信じ、その前に畏れかしこむやうな氣持ちになる。僕は妻と精神上の深い話をする事も出来る。そして僕の妻以外にも勿論さう云ふしつかりした美德を持つた善い婦人のゐる事も知つてゐる。併し男子もさうだが、多くの女は餘りに無知過ぎる。男丈けを責める事は無理なのだ。而もその盲人同士が餘りに早く結婚する事も悪い。」

「さうだ。結婚と云ふ事についても僕は何れ論文を書かうと思つてゐる。とに角何にせよ、僕は益々自分の徳を積む事の急務を感じる。今程僕は自分の徳の足りない事を痛切に感じてゐる事はない。そして又今程精進の慾求に燃えてゐる事もなかつた。此事は唯僕の徳の力にのみかゝつてゐる事は露骨だ。失敗するか否かは唯それに依る。僕の徳がどうかそれをやつて行く事に協へば何かは僕を

助けてくれるだらう。僕の徳が少しでも退き、精進が少しでも怠れば罰は靦面だ。其他の事は問ふ處ではない。神は公平な正しい處分をし給ふであらう。とに角一生懸命に謹しむで、本氣になりきつて、神の意志に叶ふ者になるやうに努めるよりない。多くの女子の貴き運命を任せられるに相應しき資格ある者になるやうにひたすら勵むよりない。」

「考へれば考へる程僕は此仕事の深い事を感じる。」高根氏はつゞけた。「此仕事をやる事になつてから猶ほ一層僕は自分の仕事の大事業である事、責任の重い事を感じて來た。しかし僕は只畏れてのみるやうとは思はない。畏れる丈けは畏れた。しかしもう僕は決心した。自分の使命を辭退しない事に。僕は樂しむで自分の全力を盡す。後はなるやうになるが、と思つてゐる。」

高根氏の本氣さは或る力となつて清澤を壓する程であつた。清澤は叫駭をうけた。そして自分も自分に許される道を益々本氣になりきつてやり抜くよりないと今更に思つた。本當に怠けてはゐられない。人生は短い。仕事は無限だ。

二人は猶ほ高根氏の事業について具體的の話をした。

「で、敷地はもう定まつたのか。」と清澤が訊いた。

「定まつた。僕は日本の中央である東京を望んでゐたんだが、適當な處がないのと、金の都合等でBに定まつた。定まつたところではない。もう地業も始めてゐる。Bは氣候もいゝし、土地も安く、

それにその兄弟の住むでる處から近いのでその人達の希望でもあつたのだ。而もそれ許りではない。日は僕には紀念の地だ。十七年前に死んだ僕の妻の郷里だ。亡妻の郷里で、丁度その十七回忌に當る今年、偶然にも女の教育を僕がやるやうになるとは妻も僕も夢にも思はなかつた事だ。が、何だか因縁のある土地なので、つい迷信的に運命の引き合はせと云つたやうなものを感ずる。」

「本當に變な因縁だね。何だか亡くなられた方の魂が生きてゐるやうな感じがするね。それではもう今年中位には落成するかも知れないね。」

「さうだ。此歳暮迄には一棟は出来る。始めはその一棟があれば充分だらうと思ふ。どうせそんなに多い入學生があらうとは思へないから。併し敷地は割りに廣いので後からいくらでも建て増しは出来る。その落成式には君も是非来てくれ王へ。少し祝ひ度いと思ふから。」

「無論行くよ。そして教員は。」

「五六人はもう略ぼ定まつた。他に二三人の候補者がある。皆僕の讀者で、中には君の讀者もある。眞面目な善い人達だ。それを選ぶのにカナリ骨を折つた。何と云つても、仕事の仕事なので、人物がいくら善くても餘り教育の素養が不足では先生にはなれない。かと云つて學者だと多くは人物が詰らない。堅くて、先入主が抜けきらない。」

「どうも人物の選定は六ヶし相だね。」

「無論直ぐ理想的に行くわけではない。しかし僕は一方教員達をも教育して行く心算だし、又生徒の大事な課目は僕が自分で教導する。教員の資格が未だ充分でない人は當分事務の方をやつて貰ふ。事務の方の人も差し當り五六人は必要なのだ。」

「俸給はどうなるのだ。」

「まあ、その兄弟が出して呉れるのだ。僕は只でやらうと思つてゐるが、困るやうだつたら貰ふつもりだ。喜んで出すのだから。先生の月給はわりにいい、筈だ。」

清澤は直覺的に宮崎の事を考へた。

「一寸話がそれるやうだが、君は宮崎文子と云ふ女の人を知つてゐるだらう。」

「知つてゐる。未だ會つた事はないが、ちよいと文通はした。最近にも貰つた。さういふ、君の知合ひだ相だね。」

「うむ。友達の細君だ。細君だつたのだ。」

「随分氣の毒な人らしいね。一度會つて見度いと思つてゐたんだ。それに今度の僕の仕事についても話して見度い事があつたんで。」

「女の教員もおくのだね。」

「うむ。適當な人さへるれば無論女の人にも教員になつて貰ふつもりだ。」

「で、話と云ふと、つまりあの人を教員に備はうとでも云ふ話かね。」

「會つて相談して見やうかと思つたのだ。手紙で見うける處では随分苦勞して来て、相當に頭もしつかりしてゐる善さ相な人らしく思ふので。君はどう思ふ。實はその事についても一應君と相談して見て、君からいろ／＼聞いて見てからにしようと思つてゐたのだ。」

「それよりも僕はその夫の宮崎と云ふ男を事務員にでも備つて貰つてはどうかと思つてゐたのだ。」

「その人は文子さんとは離縁して他の女の人と結婚したのだね。」

「離縁したと云ふわけでもない。むしろ他に内縁の妻——情婦が出来たのだ。そして子供も出来た。しかしその女の人はもう死んで了つて、今では子供と二人きりで困つてゐる。その話を詳しくすれば長くなるが要するに氣の毒な、善い人間なのだ。今は或る雜誌社に出てゐるが自分では其處を止めたがつて他に口をさがしてゐるんだ。」

清澤は併し、高根氏の請ひに應じて宮崎の來歴と運命と、人と爲りとをカナリ詳細に説明しなければならなかつた。

「それ程君の親友ならそれはきつと善い人にちがひない。」と高根氏は清澤の話を聞き畢つて云つた。「それにそんなに體もよくないとすると。どうにかしてやり度いものだ。」

「それで僕らは今宮崎と文子さんとの關係を元の鞘におさめる事の工風をしてゐるわけなんだ。し

かしそれにはその間に立つて媒介の勞を取る適當な人が必要なのだ。その人が宮崎の妹さんと一緒に相談してやつてくれると大變い、のだ。二人ともその妹さんに深く信頼してゐるので。」

「その妹さんの事も聞いてはゐる。しかし宮崎君は文子さんを未だ愛してゐるのかね。二人の間に愛がなければ無理な事は出来ないが。」

「僕の信ずる處では確かに愛はある。そして元の鞘に納まる事をお互に希望してゐるのだと思ふ。尤もその事については僕は近い中宮崎に會つて直に訊いて見るつもりだが。」

「僕も考へておいて見やう。宮崎君を事務の方に備ふ事は宮崎君さへ承知してくれ、ば僕の方では喜ぶのだ。事情次第で體が健康になりきる迄相當の自由を與へる事も出来るし、又事によつたら教員になつて貰つてもいい。殊に女學生の教員は一寸不適當な人らしくも思はれるが、實際の人物は案外善い教育者かも知れない氣もする。何方にしろ、僕も近い中會つて見度い。」

「君から貰つた本は丁度宮崎にも送つておいたから今頃はもうあれを讀んで何かそんな事を考へてゐるかも知れない。僕には非常にうまい話のやうに思はれる。日は健康地でもあるし。——處で、もう一つの話だが、もし宮崎の方にその氣があれば文子さんの方は君から促して貰ふ事は出来るだらうね。文子さんは君を信頼しきつてゐるやうだから。」

「まあ、當つて見なくては分らないが。」高根氏は考へ込み乍ら云つた。

「君がもし仲媒となつて二人を元の鞘に納めてくれる事が出来れば僕らも大に安心で、嬉しいわけだがね。實は君のやうな人が出て来てくれる事を望んでゐたのだ。勝手のやうだが。」

「さう云ふわけなら僕もその不幸な人達の爲めに一肌脱いでもいゝが、しかし僕は餘りゆつくり東京にゐるわけには行かないからなるべく早く話を定めて了ひ度いがね。さう手つ取り早くも行くまいが。」

「それでは、もしよければ今晚飯を食つてから僕と一緒に宮崎を訪ねてはどうだ。いつその事。」

「宜しい。行つて見やう。」

そして二人は夕飯が済むと家を出た。

六

宮崎の家に近づくにつれて、しかし清澤の胸には微かな動悸がうつてゐた。それは彼には久しく忘れられてゐたものであつた。彼は肺病の人の如く時々歩みを止めるやうに溜息を吐き、寒相に身顫ひをし、そして無口であつた。

暗い裏小路を行くと、宮崎の借りてゐる二階の室には明りがあかく輝いてゐた。大きな入道のやうな頭の影が障子にさし、はしやいでゐる女の子の影がうつり、下品な笑ひ聲が聞こえた。と又他の

影が立ち上つた。その影は段々小さく、はつきりして来て、束髪に結つた女の姿となつた。

清澤は思はずアツと云ひ、水を浴びたやうに立ちすくんだ。彼はそれを怖れてゐたのだ。忘れも得ぬその輪廓。

女は此方向きながら眞直に立ち、それから踞むで横向きとなり、何かを云つてゐるらしい。室内の話聲はびたりと止むだ。

清澤は上から胸を押しつけられ、かすかにうめき、其處に倒れさうな氣がした。

「お客さんがあるらしいね。」高根氏が云つた。「君が都合が悪ければ又来てもらい、が。」

が、其時ガラリと二階の障子が開いた。そして背の高い宮崎が其處に姿を現はした。

「清澤さんですか。」宮崎は試めすやうに聲をかけた。

「あ、僕だ。」清澤は答へた。

「え？さうですか？ほう……。」かう云つて宮崎は又引つ込み、慌だし氣にトン／＼と梯子を降り、そして玄關の格子をあけた。

「どうしたと云ふ氣まぐれです。貴方が私の處に、而も夜分に訪ねて来て下さるとは。——どなたですか。」

「高根君です。君に逢ひたいと云ふので、一緒に来たんです。」

高根と宮崎とは丁寧に挨拶をし、乗れ合つた。

「何と云ふ變な事があるものでせう。光榮に恐縮して下さるね。しかし、とに角まあお上り下さい。」

「お客さんは門見君ですか。躊躇してゐた清澤が訊いた。」

「え、宮崎は困つた様子で云つた。しつこい奴です。が、何でもありません。貴方々の前ぢや彼奴は温和しくしてゐますから。お邪魔のやうでしたら追拂つて下さいます。どうぞ。」

併し清澤は未だ上らうとはしなかつた。彼の心臓は大きい鼓動を續けてゐた。

「何なら、もう紹介して貰つたのだから、僕一人でも話は出来るがね。」

察しのいい高根氏はかう云つた。

「一寸お待ち下さい。宮崎はかう云つて又二階へ上つたが、直ぐ又降りて来て云つた。」

「追拂つて了ひました。二階にはもう誰も居ません。」

「八重子さんは。清澤が訊いた。」

「先刻から縁日に連れてつてくれとねだつてゐたんで、妹が連れて行きました。私つきりです。だから、でせう。」

で、三人は二階に上つた。その室は空であつた。

清澤は物足りなさ、安心とを感じた。「唯安心すべきだ。」と清澤は自分の心に云つた。併し其むさ苦しい室には彼女の香が漂つてゐるやうな気がした。

「御本を清澤さんから頂戴しました。拜見して心から感謝し度い気がしました。」宮崎は高根氏に云つた。

「貴方に讀んで頂けたのは私の光榮です。私はあ、云ふ事を始めたんで、貴方にどうか御助力を願ひ度いと思つてゐるのです。」高根氏が云つた。

「と云つても君には合點が行かないでせうが、實は今夜はいろいろ君と話があつて、一つは其事でも来たわけなのですが。」と清澤が引きとつた。

「はあ、其事と云ふと……。」

「つまり高根君が今度建てる學校の事業、つまりその事務とか、或は又教育の方に君にも、もし君にその氣があるなら、手傳つて貰へれば幸だと高根君は云ふのです。」

宮崎は笑ひ出した。

「何、私に教育の仕事を、ですつて？私が先生になるんですつて？しかも女の！ハハ、之はどうも……御冗談にも程がありますね。皮肉ではありませんまいね。」

清澤と高根とは眞面目にそれを辯解し、種々の事を委細に説明した。

「そんな事は第二として、とに角君は此事業には賛成でしやう。」清澤が云つた。

「それは、無論……」

「貴方は少くとも今の日本には必要な人物の一人です。私は貴方の健康と云ふ事も計り度いと考へて。そしてあはよくば少し差出がましいやうではありますが、貴方の生活、お身の上にも安固を望んでゐるので、」高根氏が云つた。

「それはまあ、私も望んでゐる處ではありますが、何しろ自分に力が無いのですから、さううまく行く譯もなし……」宮崎は苦笑を續けて云つた。

「力がないと云つたつてそれは一つは貴方の生理的健康が思はしくないのでせう。……」

「勿論。しかしそれは大部分君の生活から來てゐると思ひませんか。」清澤が云つた。

「え、それは無論、私は荒んでゐますよ。私の生活はわるいですよ。」宮崎の眼は輝いた。

「それなら君はそれをよくしやうとは思はないのですか。」

「どんな風にです。私はもう酒は止めました。此一年と云ふもの一滴の酒も口には入れません。女にも近づきません。そんな風にはわりに謹しむではゐるのです。私は心底から養生と云ふ事の必要を感じました。尤も妹がゐなかつたら私は誘惑に負けたでせう。悪いと知りつ、酒も續けた事でせ

う。妹のお蔭です。全く妹のお蔭です。私は始めには無理に、苦しむで、それからだん／＼樂に自然に或る程度の養生が出来るやうになりました。尤も時々はまだそんな不養生を強いてした處で何になる、それに何の意義があるなんと云ふ氣もしないではありませんが。併し此頃はもう別に飲み度いとも思いません。習慣と云ふものは變なもので。」

「意義は大ありますよ。」と高根氏は云つた。「だが餘りに淋しい生活を送られると云ふ事はよくありません。何もかも消局的になつて了ひますからね。出来る事ならなるべく生活を明るく、健全に、樂しく、積局的にして其處から活き／＼したエネルギーを取らなくてははいけません。」

「此處の内儀うちぎさんは近頃はどんな風です。」清澤が訊いた。

「相變らずです。金の爲めに人の嫌な顔を見なければならぬ位いやな事は餘りありません。早く此處を逃げ度いとは思ふのですが、訴へられでもするとなほ厄介ですし、——それに又よし他の家に移つた處で結局同じ事をくり返すよりないのですから。私は元來はすぼらではなかつたんですが、所謂「貧すれば鈍す」と云ふわけで、此頃ではすぼらの辭がついて了ひました。まあ鈍してゐるより仕方がありませんからね。」

「僕の云ふ生活と云ふ意味はさう云ふ外形上の意味ではなかつたんです。清澤が又云つた。「君の心持ちの生活の事だつたんです。氣持ちの棲すまみ家です。——とに角君はさう云ふ意味で君の生活を變

へる必要がどうしてもあるやうに僕らには思へるのですが。僭越な出しやばりと思へたら許してくれ玉へ。僕らには君が君の頭をそんな風に疲らしてゐるのは本當に濟まない事に思へるのです。いくら體の養生をしたつてそんな風にいろ／＼と氣をつかつて精力を消費してゐたのでは落ちついて充分な仕事の出来るわけもなし……」

「何、此處のかみさんの事なんぞ私はさう念頭においちやゐりませんがね。」

「まあ、今晚は少し云ひにくい事を私達は貴方に申さうと思つてお訪ねした譯なんです——」高根氏がもじ／＼して云つた。

「と云ふとつまり、先刻のお話の事ではないのですか。」

「いや、思ひきつて云へばあれよりもつと重要な事、貴方の物質上の生活の安定と云ふ事と一緒に、貴方の精神上の生活の安定と云ふ事についてです。そして貴方の御意向も伺ひ度いと思つて……」

「はあ。」宮崎はかう云つて一寸顔を赭くした。「と云ふとつまり私の過去に關してですか。」

「過去。さうです。しかしそれは現在に生きてゐる過去なのです。それが本當に消えて了つて現在に生きてゐないものならそれは問題にはなりません。處が僕にはそれは消え去つたところではなく、君の内に執拗に巢喰つて君の生活を食つて生き肥つて行く現實物に思へるのです。君の痛手に觸は

る苦痛と無禮を暫く許してくれ玉へ。僕は君がそれに觸れ度くない事をよく知つてゐます。又僕としても正直な話、他人のそんなものに觸れるのは實に閉口なのです。誰が好んで友達の傷に觸れませう。いやな事です。自分の古瘡にふれるよりも猶ほいやな事です。自分の場合だといろ／＼の意識で血止めをしてゐるが、他人の心理は勝手がき、ませんからね。只怖ろしくなる許りで。」

清澤が此處迄云つた時宮崎は遮切つた。

「いや、許してくれと云ふのは此方の云ふ事です。——相濟まない。自分の事で貴方々にそんなに御迷惑をかけるなんて。全で恥知らずです。いや、よく分つてゐます。文子の事でせう。かまひませんよ。どうか遠慮なく被仰つて下さい。貴方々の限らない御親切を思へば私は自分の痛手なんぞ構つちやゐられません。私はどんなつらい目をも避けはしません。」

「いや、それには私にも一言云はして下さい。」と高根氏が口を挿んだ。「私も文子さんとは未だお目にこそかゝらないが殆んど親密と云つてい、間柄です。私はあの方を尊敬してゐます。そして冷淡なものながらとに角あの方の運命を案じて、幸を祈つてゐる者です。」

「赤面に堪へません。——いや、今夜貴方々の思ひがけない御訪問に接した時、私は直ぐ私の職業の事、私の口、高根さんの始められた事業に關しての私の生活の口を貴方々が話しに来て下されたのではないかと云ふ事を直覺しました。しかし、まさか此事については思はなかつたので、つい清

澤さんにも苦しい思ひをおさせしたやうな譯で、本當に何と云つてお詫びをしてい、か、お禮を云つてい、か言葉がありません。貴方々がそんなに迄私達の運命を氣遣つてゐて下さると云ふ事に對して私は何を以て報いたらい、でせう。」

「貴方がどうか幸福になつて下さる事で報いて下さればい、のです。」高根氏はほ、笑むだ。

「私が幸福になる。へ、處がどうも生憎くそんな事は私の柄ぐらにないんで。私には許されてゐないのですから。」宮崎は眞赤になつて云つた。

「では幸福と云ふ言葉は暫く措きませう。そんな言葉をつかふと貴方は尻込みをされるにちがひないから。」高根は尙ほも微笑をつ、けて云つた。「その代りに神と云ふ言葉をつかつて見ませう。問題はつまりそれに従ふか否かと云ふ事です。貴方の「私」の事ではありません。」

「僕は君の今の言葉で君が僕らと同じ意味で幸福を望んでゐる事をはつきり知り得た事を感謝します。君の幸福の拒み方で、君のそれに對する憧憬心が分つた事を感謝します。そして僕らの思ひがどうやら遂げられたらしい事を心から喜びます。感謝します。」

清澤が云つた。

「貴方は何を云つてゐるんです。」宮崎は眼を光らして訊いた。

「恢復が出来たらしいと云ふ事を云つてゐるんです。」

「何の恢復です。」

「君達の最初の結婚の運命の恢復です。」

「どうして……どうしてそれが出来たらしいのです。」

「君はそれを望んで居られる事を否定はしないでせう。」

「否定……。しかし、しかしそれはいけないのです。不可能でもありません。」

「不可能とはつまり「許されない」と云ふ意味でせう。「いけない」とは「蟲がよ過ぎる」と云ふ意味でせう。」

「そ、そうです。それは餘り蟲のよ過ぎる、むしろ理不盡な横暴と云ふものです。」

「しかし君はさうなれば幸福だと思つて居られるのでせう。」

「左様。——許されない幸福だと。」

「處が許された、としたら？」

「何ですつて？誰が、誰がそれを許すんです。」

「先づ神が許し、そして女子さんも。」

「そんな事はありません。斷じてありません！私はあの女の死神です。悪魔です。あの女が私を許す。ふむ。さう云ふ事になれば凡て殺された者は殺した者を許し、辱しめられた者は辱しめた者を

許さなければなりません。」

宮崎がかう云つた時靜かに襖が開いて道子が入つて來た。

「御免下さい。妾はすつかり貴方々のお話を立ち聞きしたのでは△いけません。しかし今ふと其處で兄の言葉が耳に入りましたので妾には前からの話しが大抵分つて了ひましたの。そして妾はかくれては居られなくなつて入つて参りました。後で、兄丈けに云つても宜しいのですけれど、いつそ今皆様の居らつしやる時にお話して了つた方がお話が早く定まり相な氣がしますの。兄さん、妾は今夜その話をしやうと思つて來たんでしたの。でも、門見さんがゐらしたたので又かき廻はされてはたまらないと思つて今まで云へずにもりましたの。あの人が漸く逃けて行つてくれたので本當に助かりましたわ。」

「一體何の話なんだ。」

「嫂さんの事ですわ。妾が嫂さんと始終手紙の往復をしてゐる事は兄さんも知つてゐらつしやるでせう。そして妾が今迄、あの方がお亡くなりになつてから、始終此事を考へて、願つてゐた事も兄さんは察してゐらした事と思ひますわ。妾は時を待つてゐました。早まつた事をすれば兄さんの感情を害する許りで、事を失敗させる丈けだと思つてゐましたから。死んだ方は本當に厚く吊はなくてはなりません。しかし生きてゐる方には幸福を願はなくてはなりません。妾がどんなに深く嫂

さんを愛してゐるか、そして兄さんのあの時の仕打ちを嫂さんにも劣らずどんなに妾が怨み嘆いたか、兄さんは知つてゐらつしやるでせう。え、妾達はどんな境遇の中でも始終一緒に生き合つて來たのです。生命を支へ合つて來たのです。ひどい寒さの中で凍へる者がきつく抱き合つて温め合ふやうに、妾達は助け合つて來たのです。自分の幸福にも増してお互の幸福を願ひ合つて來たのです。

「貴女が死ねば妾だつて生きてはゐません。」「貴女の爲めに妾は生きて行きますわ。」妾達は心底から何遍となくかう云ひ合ひました。

そしてお互の深い愛に對して、自分の泣き言や苦しみを押え／＼して來ました。妾達の一人が不幸な、怨みがましい者になる事位妾達を深く悲しませる事はなく、妾達の一人が朗かな美しい心持ちである事位妾達を喜ばせる事はありませんでしたから。妾達はお互の爲めにどうかして善い、辛棒強い、健けな者にならなくてはなりません。兄さんはあの方をお知りにならないのです。あの方が一時は兄さんを殺し度い程、そして御自分もお子さんと一緒に殺して了ひ度い程、兄さんを怨み、人生を果敢なみ、悲嘆の底に沈むでゐらした事を想像なさつても、あの方が今はまるで變つた靜かな氣持で兄さんの幸福を願ひ、兄さんの不幸にどんなに心を痛めてゐらつしやるかを夢にも御存知ないのです。もちろんあの方だつて人間である以上は兄さんに對する思ひ出にはついに暗い雲がかゝる事は免れない事と思ひますわ。純粹な、明るい澄んだ心持ちにならうと願つても、どう

しても其處には悲しい、怨みがましい影がさす事は免れない事でせう。しかしあの方を普通の女と思つては間違ひです。普通の女の堪へ得ない事をあの方はよくお堪へになつたのです。随分ひどい誤解迄されて。」

「それは私も信じます。」と高根氏が口を切つた。「あの方はもう前のあの方ではありません。本當にあの方は普通の婦人なら自暴になつて身を持ち崩すか、斃れて了ふ處で御自分を向上させて行かれました。私はその事の裏に今伺つたやうな美しいお互の扶助があつた事を知りませんでした。貴方はもうあの方に對して、御自分を責める餘り歪んだ眼や、心を持たれてはいけません。餘り無理に自分を責め過ぎると人間はひねくれて了つて、結局神や光明をも退けて了ふ事になります。自分にとけを向け過ぎるとそのとけはきつと又反動的に他人に向ひます。悔むべき事を悔むのは宜しい。しかしそれはすなほに、眞つ直に光明に向ふ爲めにです。貴方の心から針を取り去つて了ふ事です。それは何方にしろ貴方の幸福を傷け害ふものです。一旦過ちを改めたらもうさつぱりしなければいけません。子供のやうに拗ねる事はお止めなさい。過去の事は過去の事としてその償ひを未來に取り返すつもりで、打ちとけた、平直な氣持ちになられる事が必要です。今直ぐ貴方に綺麗さつぱりとした氣持になれと云ふ事は無理かと思ひますが。——こんな幅つたい口を止むを得ず私がきいたからつて貴方に對する私の敬意を疑はないで下さい。」

宮崎は下を向いて黙つてゐた。

「もし兄さんがあの方を愛してゐらつしやる事をあの方がお知りになれば、そして兄さんが本當にあの方に對して御自分を悔ひてゐらつしやる事をあの方がお知りになれば、あの方は泣いて兄さんを許すに定つてゐますわ。」

「それは只あの女を苦しめる丈けの事だ。折角あの女の心に得られた平和を又掻き亂す丈けの事だ。」と宮崎はむつつきりして云つた。

「しかし本當は妾はもうその事をあの方にお知らせして了ひましたのよ。」
「何だつて？何を……」

「此間兄さんが「寂しいなあ」と思はず溜息を吐いて被仰つた時、妾には何もかも分つて了ひました。そしてもう猶豫してゐる必要はないと思ひましたの。」道子は少時らく口を喋んだが、「それから又少し前の事ですけど兄さんが病氣におなりになつた時、兄さんはよく夢の中で「文子」「文子」とうは言を被仰つた、その事も妾は書きましたわ。」

「そしたら、あれは何と云つた。」宮崎は問を置いてかう訊ねた。

「そしたらあの方は、もし兄さんさへお嫌でないなら妾は今でも兄さんの看護がしたい。兄さんが夜一人でよろけながらは、かりへ行らしつたり、懐爐を入れたり、御自分の御病氣を押してお子さ

んのはいでゐる夜具をかけたなりな姿をふと想像するとたまらなくなる。自分にそんな不自由がある度に直ぐ兄さんがその同じ不自由をなさつてゐる事をありありと想像する。そして苦しむ、と書いてお寄来しになりましたわ。」

宮崎は黙つてゐた。そして兩眼にあふれて來た涙をかくす爲めに額にキズ跡のある右の手をあてた。

「ねえ、之は不自然な事だとは君は思はないか。君達は深く愛し合つてゐるのだ。和解も出來てゐるのだ。そして君達は離れてゐる爲めに不幸なのだ。凡ての不幸が其處にあるのだ。それは馬鹿氣た事だとは思はないか。」清澤が云つた。

「私は文子さんにも私の事業を手傳つて頂く事を考へたんです。」高根氏は云ひ出した。「しかし文子さんが家庭に戻る事が出來、貴方が今日不自由な體でしてゐた事を文字さんが代つてなさり、そして貴方が充分に貴方のお仕事に實を入れる事が出來れば之れに越した事はありません。」

「そして君が何かの事で一日の中の何時間か高根君の仕事を助ける。而もそれは君も同感な仕事なのだ。それに君は健康地で、君の體にいゝ事は明かだし、さうなれば願つたり叶つたりで僕らの喜びは此上ない。又俸給の點では今の君の所得の倍位を供給する事も出來ると云ふのだから。」

「一體それはどう云ふお話なので△いますか。大凡分つてはゐるつもりで△いますが。もし妾が伺

つて宜しい事なら……」と道子は高根氏に訊ねた。

「いや、いゝどころではありません。貴女こそ私達の相談の主役を務めて頂かなくちやならないのです。私達の願ふ處を實際にやつて頂く事の出來るのは全く貴女の他にはないのですから。——はからずも今夜此處で貴女にお目にかゝる事が出來たのは實に幸でした。」

「御本は妾も拜見致しました。つまりあのお仕事をなさるについて兄にも手傳はせやうと被仰るので△いますか。」

「さうです。さうです。そして……」

「いや、有難う。有難う——」突然に宮崎が遮切つた。「貴方々の愛に對して私はどんな事でもする義務があります。何だか私位仕合せな者はないやうな氣さへします。その資格が微塵もないのになんかに愛される者が何處にゐませう。私は仕合せの大波に不意打ちを喰つて突き倒され、息も出來ないやうです。只恥しくつてたまりません。本當に何たる私は恥知らずでせう。赤恥のさらし方でせう。恥許りです。大勢の方の貴いエネルギーと時間とを自分の臍甲斐無さの爲めにこんなに消費させておめく御厄介になつてゐるとは！何たる、見共ない、不經濟な、相濟まない事です。一人の酔つ拂ひの氣遣ひをなだめに大勢の者がかゝつてゐると云ふ感じです。穴があればもぐり込んでは了ひ度いやうだ。その穴にもぐる事が私には一番適當してゐる仕事のやうな氣がする。」

「君は病人だつたのではありませんか。えらい目に遭つた。……」

「あ、私は仕事をしたい。限りなく仕事がし度い！でなければ私は死ぬ事が出来ない。宮崎は急に叫ぶやうに云つた。でなければ私は何の爲めに生れたのだ。私は熱病的に仕事に飢えてゐます。仕事の後のあの幸福な溜息に！あの傲りと満足とに充實した快い疲労に！あの空想ではなく、まるで天から授けられた默示のやうに道が開けて行く時の喜びに！有難う。清澤さん。高根さん。貴方は天使のやうに私にその道を授けて下さらうと被仰る。本當ですか。しかしあ、考へさせて下さい。私には今譯が分りません。只夢のやうです。」

「話がうま過ぎると君は思ふでせう。實際うまい話です。だから僕も實に喜んでゐるんです。しかし之は夢ではありません。善き事實です。だから君は覺める事を怖れる必要はないのです。」と清澤が云つた。

「いや、今俄かにどうと云ふ決心が貴方につく譯もありません。ゆつくり、靜かにお考へなさるがよい。今の話をもう一應はつきりと約めて云へば、私は貴方々にどうか再びお目出度く元の鞘に收つて頂いて、その上で貴方に日に来て頂いて、少し私の仕事を手傳つて頂き度いと云ふのです。貴方の都合を計つてゐるやうで實は私の我田引水な利己的やり方に過ぎないかも知れません。餘りうまい話だと思ひ込んで来て頂くと貴方を失望させるかも知れません。どうせ私達は樂をしやうと

云ふのではありませんから。——」

「樂をしやう。ですつて？私がそんな事を望んでゐると貴方はお思ひですか。私は自分を犠牲にする事を欲してゐるのですよ。本當です。私は微塵も偽を云つてゐるのではありません。私は自分を犠牲にして、死なす事を願つてゐるのですよ。何かの人類のお役の爲めにです。一分一厘でも人類の善くなる事の爲めにです。私は火の中にも飛び込みます。え、飛び込みますとも。神がそれをお命じになるなら！私は朽ちた革袋のやうな此體にその熱情を過剰に持て餘して苦しむでゐるんです。——あ、しかし私は少し昂奮しすぎたやうです。私には今自分の事が分りません。」かう云つて宮崎は頭を下けたが、又急にそれを擡げて妹の方を向き、重い調子で訊ねた。「道子。お前は一體どう思ふんだ。此事を。」

「兄さんが妾の云ふ事を聞いて下さるなら妾は答へますわ。道子は一寸間をおいてかう云つた。

「ふむ。するとお前も皆さんの御意見に賛成なんだな。」

「まあ、之を賛成しないであらませうか。兄さん。本當にあんまり善過ぎるお話なんで、妾迄夢のやうな氣がしてゐる位ですわ。」

「善過ぎる話とは、つまり何方の件についてです？」高根氏が訊いた。

「何もかも貴方々のお話しの通りになる事でゐますわ。」と道子は云つた。

「お前は どうするんだ。」と宮崎が云つた。

「妾？妾なんぞ どうだつてい、事ですわ。でも、……道子は一寸考へた。」でも、もし兄さんが妾にそばにゐる方がい、と被仰るなら妾は兄さんの傍にゐますわ。そしてもしお邪魔にならないやうでしたら妾も兄さんの家族の中に交つて、兄さん達と一緒に其處で暮しても宜しいと思ひますわ。楽しく働いて。妾も一人東京にゐる残るのは嫌ですし、八重ちやんと離れるのも嫌です。八重ちやんも亦妾にあんなによく慣ついでてくれるのですもの。兄さんの家庭にゐれば妾は一番居心地がいいのです。あ、さうなればどんなに幸福でせう。文子さんもどんなに幸福か知れません。又昔のやうになるのですわ。兄さんが學校から歸つていらつしやるのを妾達は井戸端で笑ひ話をし乍ら洗濯をして待つてゐるのですわ。ねえ、兄さん。さうはお思ひにならなかつて？」

「俺には今自分の事がさつぱり分らないが、唯此事だけは分つてゐる。」宮崎はムツツリ獨り言のやうに云ひ出した。

「と云ふのは此事は駄目だ。逆も駄目だと云ふ事だ。」

彼は頭を振つた。

「一體どうして貴方々は此事の可能をそんなにお信じになるのでせう！。私にはどうもそれが腑に落ちないので。一旦割れた瓶を又もとのやうにくつつけられると云ふ事を。しかもあんな風に内

から割れた瓶をです。貴方は私とあれとの間に和解が出来てゐると云はれる。何の事か私には分りません。取り返しのつかない事なんです。永久に。——お前は、道子、お前は實際それが出来ると思つてゐるのか。」

「兄さんの決心一つだと思ひますわ。」道子は答へた。「兄さんが謙遜な心で本當にそれを望んでさへ下されば、妾はニカワになつて兄さん達をつなぎますわ。さうすれば「妾の悲しみに免じて」と云ふ事にしてあの方は承知なさると思ひますわ。きつと。」

「さうです。貴方々お二人丈の事ではないのです。お妹さんが間に立たれての事です。でなければ私達だつてこんなに信じはしません。それに何もかもお互によく分り合つてゐる善良な賢い貴方オの間の事です。新しい結婚とは全で譯がちがふのです。貴方はお子さん達の事を氣遣はれるでせが、殊に道子さんがさうして貴方々の仲に加はつて下さる事になれば案じるより産むが易い事は保證附きだと私は思ひます。併しまあ、餘り今一時に話を急ぐのは止めませう。人間と云ふ者は變な者で、それが自分の幸福である事がちやんと分つてゐても、人がそれを自分に押しつけて來るといそれを否定してはねつけ度くなるものです。だから私達は今餘り定めこんだやうな事は云ひますまい。後はもうお妹さんとのお話の成り行きに任せて、それでは又何れ近い中にお目にかゝる事としませう。」高根氏はかう結むだ。

「どうだつて？」

歸つて來ると朝子が訊ねた。

「まあ、大抵うまく行つたやうだ。今夜の處では未だ話がすつかり定まつた譯ではないが、まあ、定つたものと同じやうなものだ。」清澤が答へた。

「道子さんにお逢ひになつたんでせう？」

「うむ。逢つたよ。」

「まあ、本當にお逢ひになつたの？」

「うむ、本當に逢つたよ。」

朝子は黙つた。

「あの人がるたんで大變話がうまく涉取つたんだ。」

「貴方、逢ひにいらしたのね。」暫くして朝子は又かう云つた。

「もう止せ。止せ。そんな駄々をこね出すと又後で始末がわるくなるぞ。」

「あ、あ、世の中が嫌になつて了つた。」

朝子がかういふを聞いて、二階の寢室へ上つて行つた。

一時間許りして清澤も寢室に行つた。そして猶ほ一時間許り夫婦は並んで寢乍ら沈黙してゐた。

「貴方、眠られないでしょ？ 今夜は。」

とうとう朝子がかう口をきつた。夫は返事をせずに寢返へりを打つた。

「そんなに妾が嫌になつたの？」

夫は早く眠つて了ひ度かつた。少くとも寢入つた振をし通したかつた。しかし時々咳をする事を抑へられなかつたので、自分のおきてゐる事を妻に知らさないわけに行かなかつた。

彼は妻が最早彼が今夜前の戀人に遣つた爲めにではなく、その事から自分の感情をこじらされた彼女が苦しませぬにたい悪いと知りつゝ、怖ろしい事を口にして了ふ氣持ちを察してゐる。彼女は又自分に惱まされてゐる夫の氣持ちが氣の毒で堪らないのである。自分の「馬鹿」に腹が立ち乍ら、而も夫を責めずにはゐられないのである。夫婦は互に相手の氣持ちを知り抜いてゐるのだ。

しかし火を點けられた薬は或る處迄燃えないわけに行かない。その火は翌日の夕方迄つゞいた。そしてそれはこんな風に消えた。

「妾は醜くなりはしなくつて。」

「さうは思はない。」

「貴方は妾の顔なんぞちつとも注意なさらないのね。」

「まあ、お前の顔も一通り役は済んだわけだからな。子供も出来たし。」

「しかし貴方は他の女の顔を眺めてもい、の？」

「ふむ。俺の哲學を聞かさう。一體妻の容色の衰へる頃は亭主の色慾も衰へて来る譯のものだらう。まあ其位の齡の割合ひで結婚するのが一番適當だらうからな。勿論男の色慾は大抵女の容色よりも長く續くから矢張り節操の徳と云ふ事も必要になるわけだが、本當に妻を愛する夫にとつては妻の容色の衰頽なんと云ふ事はさう問題になる程強く氣にはならないものだと思ふよ。自分の色つやが衰へて来ると云ふ事は、いやな事には違ひあるまいが、併しその爲に心配するには當らないのだ。其邊は微妙なもので、少くとも謹しむ事の出来る善い夫婦の間なら案外自然にうまく行くものだ。いろ／＼の物を見れば瞬間的にチヨイ／＼感情は動いても、それは只それ丈けの事で、つまり夫婦して一つの窓から外界のものを見物する位のものに止まる。普通の人間だつていくらもさうしてゐるのがある。況んや、相當に分別もあり、深い美も見える吾々に於ておやだ。どんなに黷くちやになつたつてお前は美しいよ。おだてるわけぢやないが。」

が、其時五つになる下の子が疍高い聲を張り上げて「桃から生れたキビ團子……」と調子外れに歌つて来るのが聞こえた。夫婦は思はず顔を見合はせてふき出して了つた。

八

その翌々日の午後神田の青年會館で「青空」十周年紀念の演説會が催された。

講演者は清澤、信生、A、C、D、Eの六人であつた。高根氏は其晩の祝賀會にはどうにかして列席するが、演説會には都合が悪くて出られないとの事であつた。清澤と、信生は宮崎にも演説を促したが宮崎はどうしても嫌だと云つて肯かなかつた。

四番目に出た信生の演説は「藝術は基督教に非ず」と云ふ題で、人生の他の道、たとへば宗教や道徳にとつて正道である道も藝術にとつては邪道である事がある。と云ふやうな事であつた。

「トルストイは藝術を宗教の僕たらしめやうとしました。宗教的實感が藝術の基本であると言ひました。然らざる動機から出るものは凡て人類の運命を誤るものだ、只宗教、或は基督教的道徳のみが人類を誤らず、救ふものであると云ふ立ち場からです。或る意味に於て私は此言葉を正しいと思ひます。本當に物の美にふれ、絶対にふれ、生命にふれる感情は宗教的であるといふ意味に於ては、凡ての法悦は宗教的なものであると云ふ意味に於ては、只、宗教的と云ふ事に對する解釋に於て私はトルストイと一致するわけに行かないのです。其點、凡て絶對的な感じと云ふものは宗教的なものだ。」と云つたノブリスに私は全然同感なものです。「眞正な藝術家は最も宗教的人間である」と

ロダンが云つたのも同じ意味だと思ひます。人間にはいろ／＼の法悦があり、エクスタシーがあり、それを一つのものに限らうと云ふのは、人間に青空を仰げ、然し星の空や、月夜を見るなど云ふやうなものだと思ひます。それは人類に逆行しろと云ふのも同じ事であつて、或る感激に眼がくらみ過ぎた大間違ひだと思ひます。人間が造られたもの、やうにしか生き得ないものである以上は、而もその出来榮へは偏狭な道徳家が考へるよりも遙かに多方面な、複雑な、面白いものである以上は、多くの面白い枝を切るやうな無駄な事、無謀な事をしないで、それ／＼の枝をして天の方に正しく向けしめ、生長させるやうに計る新しい道徳がなければなりません。凡て法悦から来る感情はそれを味ふ事の出来る者にとつてはおのづから最も本質的な意味に於て道徳的な、又宗教的なものであります。敬虔な深い感激に充たされて美の前に跪拜する者の心は、又同じやうな充實しきつた壯麗な感激に充たされて靜かに「眞」の前に跪拜する者の心は、エホバや十字架の前に跪く信者の心より宗教的でなく、又嚴肅でないと誰が云ひ得るでせう。宗教はいろ／＼のがあつていゝ。人類は種々なる宗教の種々なる信者であります。私は云ひます。問題は、宗派の別ではなく、迷信か、眞の信仰かと云ふ事にあると。光明的なるものを崇拜するか、暗黒的なるものを崇拜するか、靈を崇拜するか物質を崇拜するか、其二つよりないと思ひます。前者は正しく、後者は不正である。それこそ人類の運命を誤る者である。人類を退化せしめ、衰頽に導くものである、と。

苟も、光明的なるもの、上天に向つて延びるものである以上は、いろ／＼の道にそれ／＼の宗教と、神とがあつてよい、あるべきであると私は信じます。「あつていゝ」と云ふより「あらざるを得ない」のであります。そして一つの宗教が他の宗教の僕となり、一つの神が他の神の奴隷となる時、それはその宗教、その神の墮落であります。苟も一の宗教に生きながら自分の宗教の神よりも他の神をより多く禮拜することはその道の邪道であると云はれなければなりません。恥辱であると云はれなければなりません。

例へば道徳、或は基督教の奴隷となつたに過ぎない文藝、或は藝術家は、愛する事は出来たにしろ、尊敬するわけには行きません。道徳の爲めの藝術。さう云ふものもあつてもよい。それは生れざるを得ず、又生れる必要もありません。併し一層高い見地より見るならば、人生には人生の法則があり、藝術には藝術の法則がある。藝術としての宗教、及びその精神の深さはおのづから全く別なもので、凡ての傑れたる藝術のうちには宗教がある。それだけの事です。

人類は人々が新しい神を発見する事を望んでゐます。新しい眼で神が見られる事を望んでゐます。私はもう一步進んで敢てかう云ひます。大なる異端者となる力なきものは眞の藝術家とは云はれない。獨立者には獨立の神があるべきです。自分で自分の神を崇拜する力なきものは藝術家とは云はれない、と。

勿論異端だからい、と云ふのではない。實は凡人は異端でない方が、異端にならない方がい、。しかし同時にそんな人は藝術家にはならない方がい、。

私はトルストイを尊敬します。トルストイの内なる神を尊敬します。一切のものはその中に含まれるそれ／＼の神の質と量とに依つてその價值をはかられます。多量の神性を宿し、多量の神的なる言葉を語るものは凡て偉大であります。人々はかゝる人を尊敬しなければいけません。

しかし私はかう考へたく思ひます。吾々が普通に想像し、考へる神の上に、更に一層高い雲の彼方に、一つの主なる神が存在する事を。

あらゆる方面の、あらゆる種類の天才を通じ、多くの神々が此世に傳へられました。それ等の人は凡て其深い個性に従つて、一つの主なる神の發射する種々の光線を通した善きレンズの如きものであつて、一つのレンズを通して現はれる光りは他の光りを否定するわけには行きません。皆本當なのです。皆主なる神の現はれなのであります。希臘人は此事を簡單にはありませんが、考へてゐたやうです。

此事が分らない中、私は自分の室に基督の繪を懸ける事が出来ませんでした。併し今では安心してそれをかけて眺めてゐます。

宗教がトルストイの主張したる宗教よりも遙かに廣きものであり、神がトルストイの信じたる神

よりも遙かに大なる者である事は讀むべき哉。私はかう云ひます。

道德の神、宗教の神、更に宗教の中なる種々の神、科學の神、勞働の神、正義の神、愛の神、美の神：…それらの神々の上に座する主なる神を、吾々をして信ぜしめよ。吾々をしてその神に仕へしめよ。その神の爲めに生き、その神の爲めに死せしめよ。吾々をして、その神の發射する種々の光線の明かなるレンズたらしめよ。己れに忠實なる事によつて、最も忠實なる、善き神の下僕たらしめよ。凡てかゝる善き下僕の上に等しく神と人との祝福あらしめよ。——私はかう言ひます。世界と人類とは此の如き忠實なる善き下僕を皆要求してゐるのであります。——」

信生はかう云つて壇を降りた。彼の顔は昂奮のために眞赤になり、その血走つた美しい眼は焰のやうにらん／＼と光つてゐた。

「素敵でしたね。君の成長力の強いのは全く驚きますよ。」

かう云ひ乍ら彼の處に来て荒々しくその肩を叩き、手を振つた者は朝子の兄である畫家の〇であつた。

「全くい、事を云つてくれましたね。胸がすきましたよ。實際今の日本人には藝術と云ふものは土臺解らないのですからね。本當の藝術家は實際孤獨です。それでも貴方のやうな友がゐてくれると思ふと本當に私は勇氣が出ます。」

「お芽出度う。飯島さん。やつぱり貴方でなければ出来ない演説だと思ひましたよ。」かう云つて又其處へ来たのはかの「鷲の友」の青年俳優であつた。「どうも藥のつけやうのない奴はゐるもんで、貴方の演説を聞き乍ら、先生餘程トルストイに崇られてゐると見えて、頻りとトルストイに楯突いてゐるぢやないか、矢つ張り囚はれてゐるんだな、なんて云つてる奴がありましたつけ。丁度私は袂に白墨を持つてゐたんで、其奴の背中にそつと「バカ」と落書きしておいてやりましたよ。ハツハ。」
「ハツハ。いや、有難う。君達のやうな人がゐてくれ、ば僕も沙漠の中で一人で叫ぶやうな氣はしなくともい、わけです。お互に今の世の中に出すには餘りに善過ぎて、勿體ないと云ふ仕事許りを彌が上にして行くよりありませんね。どうせそんな仕事でなければ問題にはなりません、さう云ふ善過ぎた、勿體ない仕事丈けを人類は要求してゐるのですからね。勇氣をつけ合つて行きませう。——あ、しかし僕は清澤の話をお聞きしなければなりません。——では失敬。」

かう云つて信生が控へ室の方に急いで行かうとする、いきなり横合から彼の耳たばを引張るものがあつた。振り向くとそれは朝子であつた。

「演説がうまく行つたので得意になつてゐるのね。」と朝子はからかつて云つた。「本當に素敵だつたわ。妾驚いて了つたわ。貴方にあんな演説が出来やうなんて夢にも思はなかつたのですもの。だけど妾心配なのよ。あの人に演説が出来るでせうかね。あの口不調法な人に。もしや、つかへて了

つて先きが云へなくなつたり、まごついたりしはしないかと思つて妾は聴いちやゐられないわ。なまじつか貴方がうまくやつたから猶ほよ。どんな風だか一寸見て来て頂戴な。本當に氣が氣ぢやないわ。だから妾、お止しなさいと云つたのに。」

朝子は心持ち開いた美しい窪んだ口と、眼で笑ひ乍らかう云つて、講堂に通ずるドアのわきを不安相にうろついてゐた。そして扉の細い隙間から一寸演壇の方をのぞいては、又引きさがつたりしてそわ／＼してゐた。

「餘り溜息なんぞをついてゐる處をわるい奴に見つかる」と新聞にでも書かれますよ。見つ共ない。」かう云つて信生も笑ひ乍ら、靜かな講堂の中へ爪先きで歩いて入つて行つた。

九

清澤の演題は「人間の意志」と云ふので、話はかれこれ一時間以上かゝつた。

彼は先づ、「吾々の内にいろ／＼の神への傾向があり、意志があり、道がある。之等の神は皆吾々のもので、人類の創造したものであるから。人類は本來、宗教的な動物である。或る者にとつてカイザルが神となり、マンモンが神となり、自然が神となり、或は英雄や偉人が神となり、或は運命が神となり、或は又或る自然の意志の象徴を神となる。更にもつと深い意志を感じる事の出来る者

にとつては人類の良心が神となる。——清澤自身にしても神を人類の良心、それは人間の良心に比して勿論比較にならない程大きく、深く、強く、しかも極めてはつきりした、確かな、信頼し得べきものであるが——と解釋すれば、明かにそれを感じる事が出来、信する事も出来る。しかし單にそれを「完全な良心」と云ふやうな言葉を以てしたのでは未だ足りない時がある。それを善と云つても眞理と云つても、愛と云つても、正義と云つてもびつたりしないで、神と呼ぶよりない時がある。即ち吾々がもつと自由な、明るい、積極的な、幸福な瞬間にゐる時にも、吾々は感謝の對象として、悦びを捧げる對象として、或は又祝福し、讚美したい者として折々それを感じる。而して概して云へば「最も嚴やかな強い良心」或は「正義」として吾々がそれを畏れる時よりも、感謝や、讚美や、悦びを捧げる對象として、それを愛する時の方が吾々はより善いのである。より幸福なのである。が、何れにしてもそれを感じる時には吾々は比較的善き状態に居り、ハムブルな、朗かな、嚴肅な、宗教的な心持ちを抱き、吾々の内に宇宙的感情や、愛が眼覺める。」

こんな風に彼は語り始めた。

「併し乍ら神あり、故に人類あり。——と云ふ命題は吾々は信じない。先づ自然があれば人類はあり得るのである。事實は反對に、人類が生れ、その人類がその神を創造した。神を創造する事が出来なかつた時代には自然界の畏るべきものに神なる名を附し、宗教的な感情を以てそれを畏れた。

が、やがて偉人が現はれるやうになり、神は次第に自然から離れ、人間の大きな創造物となつた。吾々にした處で、吾々が進むにつれて神を認め方、否認し方、或は考へ方、感じ方が進んで来る。人類にしても同じ事である。希臘人やベルシヤ人の信じたものを吾々は信じない。簡単な意味の所謂全知全能、勸善懲惡の神を最早吾々は信じない。それらを信するよりは信じない方が進んでゐる事は云ふ迄もない。吾々はだん／＼力が出来る。古人や蒙昧人の畏れたものを吾々は段々畏れる必要が無くなる。必要が無くなつた偶像は吾々はだん／＼捨て、行く。吾々は自分で船を造り、そしてその船は次第に大きく、優勢になつて行く。古人のすがつた藁や、無力な未開人の頼る板子に吾々はもう頼る必要はない。そしてもし神を認めるにしても、吾々はその姿を現はす場所と時とを知つて來たので、方角違ひの方面にどんな不正義が行はれやうとも、吾々はその爲めに神を怨むやうな事はしなくなる。吾々は運命や自然の盲目を責める筈の場合に神を責めるやうな事はしない。そしてそれを全知全能なものと誤り考へた結果、蟲のい、無理な注文を神にする代りに、自分の無力を反省し、自分でその弱點を處分し、打ち克つて行くやうにする。

人間は此微弱な果敢ない自分達が此宏大な、怖るべき自然界の中に住むに當つて何か信仰の對象を持たずにはゐられなかつた。そして必要上それに對する信仰がだん／＼強くなつた餘り、何時の間にか、それを自分が創造したのだと云ふ事を忘れて了つて、却つて逆に神が吾々を創造したのだ

と考へるやうになつた。そしてその迷信がひどくなつた當然の反動として種々の無神論が現はれた。併し人間は進む爲めにそれ々の目標を持たなければならなかつた。そしてその目標は無神論に打ち克たれない丈けの眞實な内容と、根據とを持つものとならなければならなかつた。かくて人類の創造物たる神は人間の進化につれて進化して來た。又進化して行く。

然し乍らそれが吾々人間の創造物だからと云ふので、其事が吾々の信仰の基礎を薄弱にする理由になるだらうか。何故自分の創造物を吾々は信じてはならないのか。むしろ何物に依らずそれが吾々自身の造つたものであるが故に吾々はそれを信ずる、と云ふ方が一層自然ではないだらうか。

勿論人類以上の立ち場から見れば神は又色々考えられやう。しかし吾々はもつと人間的な吾々に近い微妙な神を欲する。そして自然界の造物主や、攝理の主以外に人間的な神を創造する必要がある。それ以外の神は吾々には遠大過ぎる。

人間は一つの意志を持つてゐる。或る世界を造らうとする意志を。

前進。之が自然界の法則である。どんな事があらうとも人間は一步も後へ退く事は出来ず、又退かうとはしないのである。そして前へ進む爲めにそれはあらゆる犠牲を賭して顧みないのである。前進とは何か。人間にとつての前進とは自然に克つと云ふ事である。自然界の住民から人間的世界の住民となる事である。人間は始めには只自然の奴隷であつた。玩弄物に過ぎなかつた。しかし、だ

んぐ、それでは我慢が出来なくなつた。そしてそれに反抗するやうになつた。そして文明を造つて行つた。しかし未だく、人間は自然の玩弄物たる運命を脱する事が出来ない。しかし、人間は自然に反抗して打ち破られ、奔弄されながら、尙ほ數知れぬ自己の屍を踏み超えて或る世界の方へ邁進して行く。もつとく、人間的な世界の方へ。だんぐ、自然界の住民から變化して自分達人間の住むに最も善く適した、人間らしい満足な世界の住民となる事。

人類の一切の運動は畢竟之である。そしてその變化を進化と云ふ。

そしてそれは進んで行く爲めに或る目標、理想に引つ張られなければならない。其目標、その意志の對象の最高なるもの。それが神である。

人生は此神、理想境に向つて運動、混沌たる流動である。

此意志は自然界の所謂盲目なる意志とは違ふと云ふよりもむしろその反對なる者である。それは只人間丈けに賦與されてゐる高尚な意志、靈の意志、即ち「愛と理性との意志」及びもつと、「事業」の意志である。

宗教、藝術、科學、道德、教育等は皆此「愛と理性との意志」、及び「事業の意志」、此三つから成り立つ「人間の意志」の現はれ方の別である。

此意志は自覺的に、或は無自覺的に凡ての人々の内に與へられてゐる。或る人々には現世の野心

として、名譽心として、又或る人々には安心立命の要求として、或は大乗的要求として與へられてゐる。そしてそれは又無言の制裁として社會に與へられてゐる。

人間は二つの意志にしか従ふ事が出来ない。自然の意志か、人間の意志か。

賢人から愚人に至る迄人間は皆その何れかの意志の犠牲である。賢人とは人間の意志を深く自覺してそれに自分の一生を最も善く献けて従つてゐる者であり、愚人とは自然の意志に盲従してゐる者の事である。

茲で云ふ自然の意志とは、勿論盲目なる生の意志、煩惱の意志、詳しく云へば盲目滅法に調和を無視して只管自我の繁榮を欲する自然界の有力なる一本能に従ふ事であつて、人間の手の觸れない土地に生ひ茂る雜草の如きものであり、人間を只生物界の殺伐な生存競争の修羅場に追ひ込み、遂には自滅させて了ふものであるが、併し一方から云へば又それは人類が成長しきらない中に餘りに早く人間が自分の意志の犠牲となり、力以上の重荷に精力を消耗して早く老い込んで了ふのを防ぐ上に必要なものと見る事も出来る。自然は赤ん坊を俄かに大人にはしない。子供に老人の思想を持たせない。自然は氣長である。人間は未だ／＼それから活氣を與へられて、生長して行くよりないのである。成長。それが自然の法則であり、此法則によつて人間は自然に打ち克つて行かうとする。此意味に於て所謂自然主義は人間の本來の傾向に對する遵行である。

人間にとつては人間の意志が絶対命令である。此絶対命令を更に自然の深い意志と見る時にのみ自然は人間の味方である。此人間の意志は自然の如く廣く、自然の如く不屈不撓であり、漠然としてゐる乍ら而も神の如く嚴格である。此意志に逆らふ者は人間界に住む事が出来ない。俗に「人情」と云ふのは人間の「愛の意志」を通俗に、低級に呼んだ言葉であるが、例へばその不可抗的要求に背いて無理に概念的な自己の幸福を追へば其者は何となく氣が咎め、人からも同情を失ひ、不幸になり、遂には身を亡ぼすやうになる。人間はたとへ自然に背く事は出来ても深い人情に抗する事は出来ない。

一末流のダルヰン主義は自然の意志の方のみを見て、此「人間の自然」の意志を無視した誤謬を持つてゐるやうに見える。

「何時の日か人間は自分の世界の住民となりきつた時、始めて心から自然を肯定し、祝福し、矢張り自然は恩の厚い親であつたと覺る時があると私は想像します。」清澤は云つた。

「實は人間の本當の意志としては、又自然の情としては自然をそつくり肯定したいのです。自然なるものを見て善しと度いのです。完全なる生の肯定。それが人間の理想であります。併し人間は未だそれだけの力がありません。自然と盲目とは一緒になり勝ちなのです。それで人間は此盲目な、美しい、然し頼り難い母から離れ、別に信頼すべき自己の神を造り、そしてその神が善しと見玉ふ

自分の家を建てやうとしてゐるのです。いろいろの方面から。そして如何なる方面であれ、此人間の意志を最も善く活かして人間の世界の爲めに働いた殊勳者は貴しとされるのです。

人生に於てはいろいろの意志が混亂してもつれ合つてゐます。見境のつかない盲目の意志にはびこられて人間の意志は其中で苦しむでゐます。併し此盲目の意志を怖れる餘り人間にそれを捨離せよと云つても人間は中々に云ふ事を聞きません。人間は子供が何かを取るやうに、どうしても一度は取つて見る。そしてそれが詰らなくなつたら捨離する。始めから捨離すると云ふ事はしないのです。人間の意志は本来一切の否定を嫌ひます。其處が即ち煩惱なのではありませんが、いくらそれが不幸であると云つても人間は避ける道を通るよりは通り抜ける道を通るのです。避けると云ふ事はし度がないのです。だからひどい目に逢ふのですが、本當にぶつかつて懲りる迄はそれを知らされてゐても人間は避けやうとはしないのです。ぶつかつて、苦しむで、犠牲を拂つて、そして卒業すると云ふのが人間の流儀なのです。あらゆる幸福を抛打つても人間は其道を通ります。否定、禁斷の道を通らずに、ぶつかつて、打ち克つて、それを肯定する道を通る。それが人間の性質です。

何と云つても人間は自然の子であるが故にその性質をうけて凡て積局的に行かう／＼とします。消局主義は「生」の意志の反対でありますから。そしてもし涅槃と云ふものがあるなら、それは人間が長い／＼間の悪戦苦闘の後で自分の世界の住民となり、自然の意志に卒業し、最早何の意志にも

はされなくなり、そして生の意志を肯定出来るやうになつて後に來る涅槃にこそ、人類は本當に満足して入るのであります。人間の意志は其處迄行かなくては本當にはおさまらないのです。」

そして清濁はどうしてもそれが人間の意志であり、吾々はその犠牲であるとすれば、吾々は自己を最も高價な犠牲となす爲めに、最も善く自己を活かすよりない。犠牲は目的ではなく、結果である。自分の内なる深い人間の意志を最も自分に相應はしい方法で善く活かす事、それを結果の方から見れば高價なる犠牲であり、その犠牲——自然の意志の犠牲に非ずして、人間の意志の犠牲の集積に依つて、吾々はだんだん人間らしい世界を造つて行くのである。吾々は此運命を自覺して互に助け合ひ、人々の内に此意志を眼覺ましめ、而して最も吾々らしく此人間の意志を果し合はう。さうすれば吾々は信生の所謂自己の神に仕へ乍ら同時に他の神の榮光を發揚する事も出來、人間全體の主なる神に仕へる事も出来るのだ。凡て人間の意志に従つてゐる仕事の中に、思想の中に異端なるものはない。それらは皆吾々のものであり、吾々に必要なものである。自分は全體的に物を廣く見渡して行く事が好きだ。自分は光明的なる、即ち人間的なる一切の意志を肯定し度いものだ。偏狭なる事と、餘りに部分的な一々の現象に囚はれて、徒らに苦しむ事は自分の執らない處だ。只、此混亂したる意志の人生の中に於て今更神の必要を自分は強く感じるものだ。吾々は今一層はつきりとその必要を感じる必要がある。何故なら吾々が吾々の世界に入り得るのは實に此神に吾々が統

「され、従ふ事によつて、あるから。——」
かう云つて清澤は壇を降りた。

10

場内は未だ次のAの演説のために動かなかつた。併し清澤が控室に入らうとした時三人の青年が廊下に彼を待ちうけてゐた。

「貴方の『哲學的』な御講演を伺つて少々お訊ねし度い事があるのですが。——」一人の髪の長い青年がかう云つて彼に近づいて禮をした。

「貴方は自然の讚美者だと私は思つてゐたのですが、只今のお話しに依ると貴方は自然を悪いものと見做してお居でのやうですね。大分自然をおケナしになりましたが。」

「私は無論自然の一面について云つたのですよ。深い意味に於てなら私は無論永久に自然の讚美者です。自然を愛する情に於て私は大抵の人には劣らないつもりです。それに又自然を愛するのは人間の自然です。不自然と、虚偽との中で窒息し相な感じを味ふ者は、自然の有り難さを感じないではりません。併し自然は要するに神秘的な事實であつて、理想ではありません。貴方は馬鹿な自然主義者のやうに情慾や、残忍性や、掠奪慾を善いものだと思ふのですか。怖ろしいものだとは思は

ないのですか。又さう云う自然に従ふだけの生命がいかにか脆く、儂ない、憐れなものとは思はないのですか。貴方々は又思想も、文字も、着物も、家も、燈火もない獸類同様な原始的生活に歸り度いと思ふのですか。」

「いや、分りました。私も人間の意志を認めます。只貴方が愛と理性との意志の外に、事業の意志を特にその中にお入れになつたのはどう云ふわけですか。」

「事業の意志と分ふのは愛や理性の意志とは又別に存してゐる一つの本能ですから。世の中には理性や愛の意志からのみ産れたとは云へない人間の特産物があります。只その中に人間の意志と調和してゐるものとするものがあるのです。」

「その調和したものとは例へばどんなものですか。」

「い、音楽などもその一つです。それは人間の喜びの爲めに、人類の優秀を發揮するものとして生れたものです。」

「それは愛の意志と一致してはゐるのですか。」

「結果の上には一致します。併し生れる動機は別です。」

「それならそれは純粹に愛や理性の動機から生れたものより、つまり宗教や、哲學や、道德より一段價值が劣るわけではないでせうか。人間にとつて。」

「しかし愛や理性の理想は何ですか。善き藝術はおのづからそれを歌ひます。優れた思想や、道徳が人間に理想境に對する本當の愛や、欣求の心を起させるやうに、善き藝術の本質は又藝術獨特の方法によつて人間に高い喜びを求めさせ、人の心を美しくし、和らけ、或は勇氣づけ、嚴肅になし、朗かになします。百聞一見に如かず、と云ふやうにそれはどんな説明も及ばない事を一閃の魅力によつて語り盡します。ロダンを氣取るのではありませんが、本當に美を敬愛なさい。美の前にお跪きなさい。それは深い善と同じく、人の心を神に結びつけます。本當です。貴方は偉い藝術の中に現はれてゐる神の一面を見る事がありませんか。」

「え、。ですが釋迦や孔子はそれらの人達より猶ほ偉大ではないでせうか。」

「さうです。大聖人は一番人間の中で偉いなるものです。彼等の人格の美には一寸人間の造つた美の中で及ぶものがありません。彼等は人間の事業の中で最も大いなる事業です。しかし彼等も人間の意志の凡てを盡しきつた人達ではありません。人類はなほ多くの事業をし度がつてゐます。彼等のなさなかつた、又爲す事の出来なかつた事の中にも猶ほ幾らも人類の意志に叶つてゐる、仕事はあるのです。そしてさう云ふ事もいろ／＼人間はし度がつてゐます。」

「あ、貴方は事業と生活と云ふ事について論文をお書きになりましたね。——人間は壽命の短い事を知つてゐる。その短い壽命の間で何に一番人間が多く牽かれるかと云へば事業にであつて生

活にはではない。そして其欲望がいろ／＼の事情で中々思ふやうにうまく行かない處に生の苦痛がある、と云ふやうな事をお書きになりましたね。」

「さうです。生の苦痛はそれのみではありません。とに角人間は皆何かし度いのです。し度くて堪らないのです。其本能の爲めについ善くない事もするのですが、生れた者が只生活を第一義としてそれで終始すると云ふ事は餘りに人間を馬鹿にした事です。勿論原始時代には只生きる事が目的であつたでせうが、境遇上生活と云ふ事に迫はれる餘り、勢ひその事を一番問題にするやうに強ゐられてゐる人々でも、本來の性質から云つて事業が目的である事は當然な事です。人間は只生活の犠牲となるにしてはもう少し高等に造られてゐるのです。プラトーンも云つてゐます。人類は二つの不滅を願ふ。一は生殖に依る肉體的自己の存続を。もう一つは精神的不滅を。と。そして精神的不滅は有形無形によらず事業に依るよりありません。傑れた人格を造る事も一の事業であり、修養も、教育も、感化も皆事業であり、祈禱も一の事業であり、言葉も一の事業であります。とに角生活なぞの事には早く超越して専心自分の事業に没頭したいのが人の自然なのです。「生活はどんな風に通つてもどうせ五十年かそこらで終つて了ふが仕事丈は何かしないではおけない。そして何か仕事で成功すれば自分の生命は消えない。」と云ふ氣が人にはあります。且つ又「仕事で苦勞をするんだから出来る事なら暮しの方では樂をし度い」と云ふ氣もあります。短い壽命の間の生活はどんな風

に送られても大した變りはないが、その間に事業をするかしないかは人間にとつて大きな懸念となるのです。」

「つまり人間は自分の事業に對しては本能的にムキになるが、生活問題に對しては冷淡であるやうとする——と貴方は被仰るのでね。」

「さうです。人間が道德の云ふ事を中々肯かないのは勿論其他にも原因はありますが、とに角一つには此急がしい事業慾に彼等が遣はれてゐる爲めなのです。だから生活が本當に人間を牽きつけるやうになるためには生活その物が一の事業とならなければなりません。やつても始まらない氣のする事や、興味のない事には人間はムキにはなれないのです。」

「しかしそれでは道德と抵觸しないでせうか。人間を只事業慾丈けに任せておくと云ふ事は。」

「舊來の道德は人間に平らになれ、地平線に並べと云ひます。しかし人間は各々地平線の上に自己の頭角を現はし度がつてゐるのです。即ち山となり度がつてゐるのです。」

「山となり度がつて。」

「さうです。人間はたとへ一方に谷を持たうとも山となる事を欲してゐるのです。そして事實人類の歴史上には唯地平線上に現はれた山丈けが残るのです。天才や偉人は皆その山です。彼等の或る者の持つた谷は或る平凡人の谷よりも深い事もありました。しかし頂上が地平線上に抜け出てゐれば

畢竟其處丈けが人類の史上には残るのです。そしてそれが人間の意志なのです。だから只平らなれ、而して正しかれと云ふ要求は中々充たされず、いつも此地上は凸凹してゐます。單に地平線上に温和しく並ぶ事に人類が昔から全力を盡したらそれは六ヶしい事ではなかつたでせうが、人間は家畜と違つてさう云ふ慾望があるので、道德は常に困難に逢ひ、それ丈けに又必要なのです。」

「では人間は永久に道德と争ふのでせうか。」

「さうも思ひません。一體人間が山となり度いと云ふのは即ち事業をし度いと云ふ慾望で、その慾望自身は別に善でも悪でもないのですが、只多くの人間は餘りに盲目なりに不調和な野心丈けを持つてゐるので偉大な山となる事が出来ないのです。彼等は金錢の山や、詰らぬ世間での地位の山を角築き度がつて空しき快樂を追ひ、人間の意志に善く従ふ事が出来ません。が、それにしてもその無知なる人々も銘々山となる事を欲してゐるので、自己のモニメントを此世に残し、自己の不滅を願つてはゐるのです。只それが醜惡にしか現はされ得ないので。しかし絶望する必要はありません。空しき塔は片端から崩されて行きます。そして結局は人間の意志に叶つた山丈けが此世に残るのです。永い間には人間もだん／＼利口になつて、空虚な塔を築く事に一生を捧げる事の馬鹿らしさを覺るやうになり、もつと調和的な働き方をして人間の名譽、人間の幸福の爲めに人類の事業の山を築く事にだん／＼統一的に、生産的に働くやうになるでせう。」

「では貴方は別に道徳に謀叛をなさるおつもりでもないのですね。」

「どうしまして。僕は道徳に深い敬意を拂つてゐます。その永いく不屈不撓な、驚くべき根氣に對しても敬意を拂はざるを得ません。道徳は人間の爲した偉大な、確實なる事業の一つです。僕はどんな場合にも決してそれと縁を切らう杯とは思ひません。それどころがどうか私の一生をその進歩に役立たしたいと願つてゐます。僕に許された事業をして行く事によつて。——しかし猶ほ質問があるなら僕の家に来て下さい。今は一々お答へをしてゐる暇がありませんから。」

青年は不精々々に去つた。

一人の青年が後ろを向いた時、その背中には白墨で「バカ」と書いた跡が残つてゐた。

清澤は遠くに門見の姿をチラリと見た。そして其處へその三人の青年が寄つて行くを見た。が、丁度其時拍手が聞こえ、續いてドヤ／＼と云ふ聲が聞こえ、多勢の者が其控へ室に集つて来た。信生、A、E、C、D、が續いて入つて來、その後笑ひ乍ら朝子が兄の〇夫婦と一緒に入つて來た。

「お芽出度う。御苦勞さん。い、演説會だつたね。」皆は互にこんな事を云ひ合つて茶をのんだ。

「やあ、失敬。急いで來たのだが君の演説に間に合はないで本當に残念して了つた。」かう云つて其處に入つて來たのは高根氏であつた。

「いや、それよりも君に演説をして貰へなかつたのは猶ほ残念だつた。——君はいつ歸るのだ。」

「明日。處で、宮崎君は今日此處へ來てはゐないのか。」

「丁度そこへ入らつしやいましたわ。脇坂さんの御夫婦と一緒に。」と朝子が嬉し相に云つた。

其時宮崎は一人の老人を連れて脇坂と話をし乍ら入つて來た。

「先夜は失禮しました。之が私の父です。」

宮崎はさう云つて自分の父を皆に紹介した。

「やあ、皆さん。「青空」の方々。私はこんな氣持ちのい、演説會を此處迄聴いた事がありません。

私は若い貴方々と握手をし度い氣持ちで一杯です。私は嬉しいのです。貴方々の若々しい、深い力の籠つたお顔を見ると、私は死に度くないと云ふ氣と死んでもいと云ふ氣とがします。若い、力強い、有爲な貴方々が吾々老人の後に残る。私が貴方々の後に残らずに貴方々が私達の後に残る。之は當り前の事ではありますが、私にはそんな事が何とも云へぬ夕暮の快さを與へます。あ、皆さん。皆さん方を持つ日本は頼もしい。日本にも漸く時が來ました。世界はもう日本を注意し出してゐます。少くとも世界の心懸は日本を注意し出してゐます。今迄は西洋は東洋を感化しました。導きました。之からは東洋が西洋を感化する時になりさうです。精神的にです。日本はもう幼年ではありません。少年でもありません。青年です。それも廿四五才の立派な青年です。それを本當に知つてゐるのは日本の中でも或る人々丈けです。貴方々にその或る人々です。一九二〇年頃から始

まつて三〇年、四〇年頃の日本は見物でせう。本當に大した黄金時代を實現するかも知れません。だが、私はそれを見ずに死ぬのです。」

老人はかう云つた。皆はおのづから此老人の方に頭を垂れた。

「私は常に日本を信じてゐました。そしてそれが誤りでなかつた事を此夕の演説會ではつきり知る事が出来たのです。私は幸福です。が、皆さん、此處に私の息子がゐます。不幸な目にいろく逢ひました。一時は私と不和になつて別れてゐた事もありました。しかし私は常にこれを愛してゐました。弱い處はあるが、善良な、愛すべき男です。私は遠からず此息子とも別れなければなりません。どうか、皆さん。末長く、これとおつき合ひ下さい。そしてこれの足が遅れたらおいてき堀にしないで手を引いてやつて下さい。お願いします。」

皆は涙ぐむだ。

「僕らは皆宮崎君を敬愛してゐるのです。そして之からの宮崎君の仕事に益々大きな期待を持つてゐます。おいてき堀にするどころではありません。」

A がかう云つた。

「お蔭でこれも今度から善い仕事にありつく事が出来まして。其爲めに之は近く東京を去るやうになります。どうか、其爲めに餘りに御疎遠になるやうな事のないやうに。そんな事もないでせ

うが。」

「それでは君は承諾して下さいつたのですか。」高根氏がかう訊いた。

「感謝します。あれから自分でもゆつくり考へても見、又妹や、父とも相談して見ました上、何もかも貴方々の御親切に従ふ事に決めました。私としてもう何も主張すべきではありません。」

「では貴方は義務として不精々々にと被仰るのですか。」

「私は只餘りに幸福になる事を怖れたのです。」宮崎が答へた。

「何もかもと云ふと、では一方の方の事もですか。」清澤がかう訊いた。

「清澤さん。高根さん。貴方々には特に御禮の申しやうもありません。恐縮して了ひます。貴方々のお話は委細伺ひましたが、實はあの事は私も疾うから願つてゐた處なのです。それで、急に思ひ立ちまして、今晚の夜行で私はこれと二人で仙臺の文子を尋ねる事にしました。」老人はかう云つた。

「父と一緒に待つて見る事にしました。私が膝を屈し、父が頼んでくれれば、あれも或は氣を取り直してくれるかと云ふ氣がします。」

「いや、うけ合ひです。きつとうまく行きますよ。」と清澤が云つた。

「大丈夫です。それに貴方々の間にはお妹さんが立つて居られるし、私もとりあへず昨晚、あの方に手紙を差し上げておきました。いや、私は一足先きに向ふへ行つてゐて、校舎が建つ時分には貴

方々のお住みになる適當な家を見つけておきませう。今から楽しみにしてお待ちしてゐますよ。』高根氏が云つた。

「何もかも萬歳だ。併しまあ、祝ふ事は凡て後に延ばす程いゝ。どうぞうまくやつて来て下さい。心から祈つてゐます。』

清澤はかう云つた。

結文

更に日月は流れて行つた。

8に校舎がどんく建ちつゝ、ある間清澤の一家には不幸が來た。

それは彼の母の死であつた。

清澤は其の母の長い間住むでゐた思ひ出のある家をこはし、それを相州の海岸へ持つて行つて建てた。子供の健康にもいゝと云ふので。

そして清澤一家は九月の初め其處に引き移つた。

平和な穏かな日がつづいた。

木

暑い日には彼は朝子と子供達とをつれて海に入つた。子供は波に戯れてキヤツ／＼と幸福にはし

やぎ、朝子は彼に遊び方を教はつて笑つた。そして青空と太陽とが彼等の上に擴がり、輝いた。

或日信生はその最近に出來た戀人を連れて彼の家を訪ねた。

信生も幸福に酔ひ、いつにもまして元氣であつた。

「此頃宮崎から使りがあるかい。』

信生は訊いた。

「宮崎からは暫くないが、昨日高根から來た手紙によると、宮崎も本當に落ちついたらしい。文子さんも落ちついてうまくいつてゐるらしい。』

「道子さんも一緒なのだね。』

「いや、道子さんは未だ來ないが近い中に阿父さんと一緒に來る筈だと書いてあつた。』

「では道子さんなしに二人が落ちついてゐるやうだと餘程うまく行つたわけだね。』

「そうだ。うまく行つたのだ。しかし今度道子さんが行けば道子さんはすつと後に残つて、阿父さん丈けが歸られる都合らしい。さうなればなほい、だらう。』

「で、宮崎は何か仕事でも始めてゐるのか。』

「うむ。論文を書くこと云つてゐる相だ。體もめつきり力がついたららしい。』

「それは結構だね。——そこで子供達は。』

「子供達は毎日一緒にその學校へ仲よく通つてゐる相だ。連れ子同士十二になる文子さんの男の子と、十になる宮崎の女の子と。二人の後ろ姿を見て親達はいろ／＼の事を空想するなんと云つてゐる相だ。」

「とに角めでたしく／＼だつたね。——そこで高根君自身の仕事もうまく行つてゐるのか。」

「そう急にも行くまいが、今日も云つて来た。多くの善き母親を造ると云ふ事が自分の仕事であり又理想だ。善き母親。此一語を想つた丈けで自分は涙が出る程眞剣になれる。」と。運命はどうであれ、彼奴はきつとあの仕事を爲た丈けの甲斐は示すだらう。」

「此方も自分の仕事を益々やり抜くよりないね。」

「そうだ。僕らは僕らの仕事をやり抜けばいいのだ。何事も努力と、やりやう次第ではいくらもめでたしく／＼になり得るのだ。——どうだ。一つ海岸へ出かけて見ないか。」

皆は海岸への畑道へ出た。清澤と信生とが半丁許り前を歩き、日傘をさした朝子と、信生の戀人とが後から青い畑の中を歩いて来た。

「よく耕してあるだらう。此方へ来てから大分畑にお馴染みになつたが、此耕された後の土を見るとその一蹴々々の跡に耕す人の魂が生きしるるやうで、之を見ると人間と云ふものと土との關係の深さをしみ／＼感じるよ。」

清澤はかう云つた。

二人は日没の濱へ出た。

赤い大きな太陽が望色をした伊豆の山の後ろに沈みかゝり、富士の姿がクツキリと大きく見晴らされた。

「い、山だね。」信生が云つた。

「立派な山だよ。大聖人の徳そのもの、姿のやうだ。静かで、嚴かで、氣高くて、麗しい。近くへ寄ると壓迫を感じるが、此邊から見ると柔和で、優美で、快い。全で大きな美術品のやうだ。變なもので、かう云ふ立派な自然を見ると山に對して、一種尊敬に似た感を抱かせられる。あ、云ふ落ちつきを得たいものだ。」

「此無限さを見て、永遠と云ふものを想はずにゐられやうか。」又一方の空を見て信生が云つた。

「自然萬歳だ。人間萬歳だ。」

「そして神萬歳だ。」と清澤が云つた。「凡て其意志の爲めに働く者の上に祝福あれ、だ！」

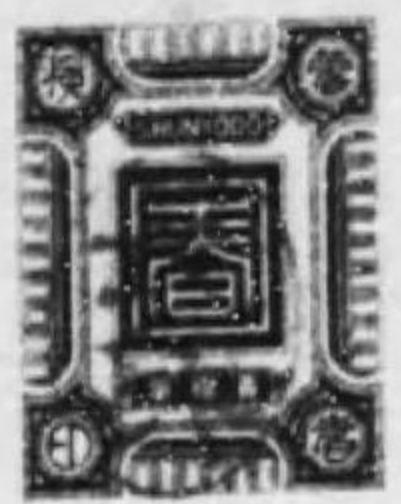
二人は立ち停つて沈み行く太陽の方に向ひ、そして何か祈つた。(完)

一九一九年二月起稿

一九二〇年五月攔筆

大正九年九月廿一日印刷
大正九年九月廿四日發行

印者作著



『或る人々』 定價金參圓

著者 長與善郎

東京市日本橋區通四丁目五番地

發行者 和田利彦

東京市芝區櫻川町二十番地

印刷者 植田庄助

東京市芝區櫻川町二十番地

印刷所 株式會社 大高印刷所

東京市日本橋區通四丁目五番地

發行所 春陽堂

電話本局五一七番
振替東京一六一七番

圖書目錄遺呈……往復葉書申込次第……春陽堂

□ 類 書 作 創 □

芥川龍之介著	鼻	(短篇集)	定價金 八十六錢
芥川龍之助著	影 燈 籠	(短篇集)	定價金 十二錢
菊池 寛著	冷 眼	(長短篇集)	定價金 十二錢
里見 淳著	慾 影	(小說集 第三篇)	定價金 十二錢
有島生馬著	鏡 中 影	(長短篇集)	定價金 十二錢
里見 淳著	毒 草	(短篇集)	定價金 二十錢
白樺 同人	白 樺 の 園 情	(短篇集)	定價金 二十錢
水上瀧太郎著	旅	(長短篇集)	定價金 二十錢
佐藤春夫著	佐藤春夫選集	(長短篇集)	定價金 二十錢
葛西善藏著	馬 糞 石	(長短篇集)	定價金 二十錢
志賀直哉著	あ る 朝	(長短篇集)	定價金 六十錢
菊池 寛著	恩 を 返 す 話	(短篇集)	定價金 六十錢

□ 著 氏 郎 善 與 長 □

■ 明 る い 部 屋 (版二)

□大形特製美本
□洋装三五〇頁
□價壹圓八拾錢
□送料十一錢

白樺派作家の英才たる長與善郎氏の文壇に於ける旗幟、地位に就ては今更喁々する要なし。若し敢て贅言せば、その作品スケールの雄大な、觀察の深刻なる、表現の力強き、思想の該博なる點に於て現文壇に於て獨自の稱がある。然して更に人生の諸相に對する態度道徳的なる、博愛的なる、眞摯なる點に於て若き人々の崇敬の標的となり、所謂「白樺派作家」の代表者を以て目されて居る。此一編に蒐められたる「貴族の孤兒」「寶石の話」「小さな大事件」「靈前に」の五編、皆それらの特色を持つた眞の意味の貴き藝術品である。この一巻を特に「明るい部屋」の面目な藝術的作品を喝仰する人々に薦むる所以である。岸田劉生氏の裝幀亦白樺派の藝術の精粹である。

新興文藝叢書第十二篇

■ 陸 奥 直 次 郎 (版三)

□定價金八拾錢
□送料 八錢

白樺派作家の第一人者長與氏が勞作にして文壇に是非の論沸騰せる長篇作、十二歳にして既に春を解し過剰なる性慾に苦惱する男爵の嗣子直次郎が半生に於ける性的生活の深刻に描破せる嚴肅なる雄篇也。添ふるにダビデとバデシバを以てす、近來の好著。

2576

鈴木三重吉先生編

清水良雄先生裝畫

■ 世界童話集

定價一冊金八拾五錢
送料一冊送十六錢
四冊送十八錢

東京日本橋通
春陽堂
振替六一七一

第一編	黃金鳥 (八版)	第十一編	慾ばり猫 (三版)
第二編	鼠のお馬 (七版)	第十二編	黒い小鳥 (三版)
第三編	星の女 (七版)	第十三編	七面鳥の踊 (三版)
第四編	青い鸚鵡 (七版)	第十四編	大法螺 最新刊
第五編	海のお宮 (五版)	第十五編	一本足の兵隊 <small>んさ</small> 近刊
第六編	湖水の鐘 (五版)	以下續刊	
第七編	魔女の踊 (五版)		
第八編	黒い沙漠 (五版)		
第九編	銀の王妃 (四版)		
第十編	馬鹿の小猿 (四版)		

501

51

終